

学 位 論 文 題 名

マドヴァの救済理論の研究

学位論文内容の要旨

本論文の主題は、13 世紀のヒンドゥー教思想家マドヴァの救済理論とそれを根拠付ける存在論、およびマドヴァの思想に対するヒンドゥー教聖典からの影響関係の解明である。ヒンドゥー教神学は大別して、ヴィシュヌ神への無私の信仰と他力救済を説くヴィシュヌ教のものと、シヴァ神に倣った修行と自力解脱を説くシヴァ教のものとに区別されるが、マドヴァはヴィシュヌ教の立場から独自の神学を打ち立てている。マドヴァは、ヒンドゥー教哲学を代表するヴェーダーンタ学派の思想家のうち、シャンカラ派・ラーマヌジャ派に次ぐ第三の勢力をもつ流派の開祖である。本論文は、序論と、三つの章をもつ本論より成る。本論の中心は第三章であり、そこで申請者は、マドヴァ思想の背景を解明するために、ヴィシュヌ教の一派であるパンチャラートラ派聖典にみられる世界創造説と、マドヴァ思想との比較検討を行っている。歴史的に見るとヴィシュヌ教の主流は、紀元前 4・5 世紀に遡るバーガヴァタ派と、紀元後に形成されたパンチャラートラ派とに大別される。バーガヴァタ派は、司祭階級であるバラモンが発展させた古代宗教（ヴェーダの宗教）内の一神教的傾向と民間の伝説的英雄信仰との混交により成立したが、パンチャラートラ派は、男性原理と女性原理の合一状態を万物の根源とする所謂タントリズムの宗教であり、初期の段階ではバラモンの権威を否定する異端的宗派であった。

序論は、まず先行研究を集約してマドヴァの年代を推定する。そして多岐に渡る著作を概観し、更に誕生から死に至るまでのマドヴァの伝説集を詳しく紹介している。

本論第一章は、第一節において、知・行・信の三通りの宗教的実践を説くヒンドゥー教の代表的聖典『バガヴァッド・ギーター』の教説をまとめた後、**第二節以下**において、マドヴァがそれら相互の関係をいかに解釈するかを通じて、彼の救済理論を解明する。一般民衆の救済を主眼とする宗教家は一般に理性よりも信仰心に訴える傾向があるが、マドヴァは知識と行為の両方ともが神に全てを委ねる信仰に支えられていなければならないとしつつも、私心のない行為は神をありのままに認識するための手段であると述べている（**第二節**）。また因果応報については、完全な解脱は現世の身体を離脱してからのみ可能となるという、ヴェーダーンタ学派の伝統的教説を継承しつつも（**第三節**）、奉仕者階級のシュードラや女性はヴェーダの祭式からは除外されているが、彼ら彼女らにもヴィシュヌ神の名前を唱えることにより解脱が可能であることを『バガヴァッド・ギーター』が保証していると解釈した（**第四節**）。さらに**第五節**では、マドヴァが信仰を「シュラッター」（確信）と「バクティ」（信愛）とに区別して、情念的なバクティを神の恩寵が下るために必要な前提と見なしつつも、シュラッターを神の卓越性を確信する知性の働きと見なし、バクティを完成するための前提としていることを見出した。

第二章では、まずマドヴァの存在論の枠組みを提示した（**第一節**）後、世界を支配する神と神により救済される個我とをマドヴァがどう捉えているかを解明する（**第二・第三節**）。マドヴァの考えていた神は、基本的に『バガヴァッド・ギーター』において述べられている最高神の概念と一致するが、『ギーター』には説かれていない「最高神の配偶者としての女神」の概念を『ギーター』解釈に持ち込んでいることが明らかにされた。さらに**第四節**は、マドヴァがパンチャラートラ派と同じく、神本体からの諸神格の派生過程、及び諸神格による世界と個我の形成過程を段階的に説く世界形成説をもっていたことを明

らかにした。第五節では、「絶対者ブラフマンのみが実在するものであり、世界は虚妄である」と主張するシャンカラの形而上学をマドヴァがいかに批判したかを解明した。

第三章「マドヴァ思想の背景」では、マドヴァ神学の主要な諸要素を、マドヴァの時代には完成していたパンチャラートラ派の教理と比較対照し、パンチャラートラ派からの影響関係を実証している。比較検討の対象となる文献は成立の古い順に、大叙事詩『マハーバーラタ』に編入された「ナーラーヤニーヤ章」、『アヒルブドゥニヤ・サンヒター』や『ラクシュミー・タントラ』等のパンチャラートラ派文献、およびヴィシュヌ教バーガヴァタ派の代表的聖典の一つ『バーガヴァタ・プラーナ』である。第一節では、マドヴァにおける「神の本体からの諸神格の派生」を検討し、彼の教説は「ナーラーヤニーヤ章」の教説と基本的に一致するが、神の本体とそれから派生した諸神格との間に別異性を設ける説はマドヴァには見られないということ、さらに、女神の働きによる諸個我の発生を説くという点で、特に『ラクシュミー・タントラ』との類似性が高いということを指摘した。第二節では、マドヴァの個我概念とパンチャラートラ派の個我概念とを比較検討し、その異同を明らかにした。即ち、パンチャラートラ派は個我と最高神とは本来同一であるとするが、マドヴァは両者の本来的別異性を強調している。しかし、個我の精神性を阻害している無明を払拭するには女神ラクシュミーの恩寵が不可欠であると説く点では、マドヴァは『ラクシュミー・タントラ』の立場と一致していると言うことができる。第三節では、物質原理の展開説についてマドヴァとパンチャラートラ派文献を比較し、マドヴァの学説は、展開のプロセスのうち、自我意識の展開までは『ラクシュミー・タントラ』の説とよく一致し、それ以降の物質諸原理の展開の面では、『バーガヴァタ・プラーナ』の説と一致するということが明らかとなった。第四節では、マドヴァの解脱観と「ナーラーヤニーヤ章」等のそれとを比較し、一番大きな相違点として、マドヴァが、解脱とは、恩寵を受けた者達のみが住み「白い島」と呼ばれる理想郷に至ることであって、最高神との合一ではないとするのに対し、「ナーラーヤニーヤ章」等の文献は一樣に、最高神との合一が解脱であると主張していることを突き止めた。第五節では、パンチャラートラ派の世界形成説を、マドヴァがどのようにウパニシャッド解釈に利用しているのかということを明らかにした。マドヴァは、ウパニシャッドの中で世界創造者として語られているアートマンをヴィシュヌ神と見なし、世界の構成を解き明かすウパニシャッドの箇所はヴィシュヌ神の現れを説いているものと見なしていることが、本論文により判明した。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 藤 井 教 公
副 査 助教授 吉 水 清 孝
副 査 助教授 花 井 一 典

学 位 論 文 題 名

マドヴァの救済理論の研究

審査の方法および経過：

平成 13 年 12 月 14 日（金） 審査委員会発足
平成 13 年 12 月 17 日（月） 第 1 回審査委員会 論文コピーの配布，論文概要の紹介，申
請者の履歴の確認，および審査日程の打ち合わせ
平成 13 年 12 月 21 日（金） 第 2 回審査委員会 内容の検討
平成 14 年 1 月 9 日（水） 第 3 回審査委員会 内容の検討
平成 14 年 1 月 25 日（金） 口述試験
平成 14 年 1 月 25 日（金） 第 4 回審査委員会 口述試験結果の検討
平成 14 年 1 月 30 日（水） 第 5 回審査委員会 報告書原案の作成・検討

当審査委員会は、以下に述べる諸点において、本論文がインド哲学の研究領域での新たな研究成果を挙げていることを認定した。マドヴァが、信仰による普遍的救済の可能性の根拠として神と個人との絶対的隔絶を説くこと、及び、信仰による救済を啓示する教典としてバーガヴァタ派聖典から多くの文句を引用することは従来より指摘されていた。しかし従来の諸研究は、マドヴァの著作のごく一部分を扱っていたに過ぎない。本論文は、マドヴァとパンチャラートラ派との関係を探るという全く新たな視点から、従来等閑に付されていた著作にも目を向けつつ、マドヴァが、バーガヴァタ派と異なって瞑想による神との合一を目指すパンチャラートラ派の聖典からも多大な影響を受けながら自己の神学体系を構築していたことを発見し、サンスクリット語原典のうちに実証的に跡付けることに成功した。研究成果を要約するなら、本論第一章はマドヴァの説く信仰の性格を分析し、マドヴァが、バーガヴァタ派が宣揚する熱烈な信愛（バクティ）とは別に、知性の働きにより神の様々な姿を認識して確信すること（シュラッダー）を重視していたことが明らかにされた。第二章はマドヴァの神学体系における存在構成を主題とし、マドヴァが、神は世界から隔絶していると説きつつも、パンチャラートラ派と同じく、神の配偶者としての女神の働きを重視し、さらに「唯一の神からの世界の派生過程」（ヴィューハ）を論じていることが明らかにされた。第三章は、マドヴァのヴィューハ説を実際のパンチャラートラ派聖典での記述と比較し、マドヴァが、瞑想において神学体系を理解することを強調するパンチャラートラ派からの影響のもとで、バーガヴァタ派の熱烈な信仰を理知的な信仰へと転換したこと、そして更に、ヴィューハ説の枠組みにより古代のウパニシャッドの教説をも再解釈して、自身の救済理論に組み込んだことを明らかにした。

次に当委員会は、本論文の評価と、本論文を提出した池邊宏昭氏への学位授与に関して、次のような所見をまとめた。マドヴァ教団はインドのヒンドゥー教人口の中で相対的には少数派であるが、マドヴァはインド宗教思想史上極めて重要な人物である。なぜなら彼は階級差別の厳しいインド社会において、最下層民すら神への献身的な愛によって恩寵

を受け救われる、と公然と主張したからである。しかしながら、マドヴァ研究は未開拓の分野であり、専門の研究者は、日本国内はもとより欧米にもほとんどいないのが現状である。先行研究が乏しい現状にあって、池邊氏が、多くのサンスクリット語原典を註釈と共に精緻に解説した上でマドヴァ神学の新たな側面を発見したことは、現代におけるヒンドゥー教の理解に大きく貢献するものであり、本論文は、インド思想史における新分野を開拓する意欲的な研究であると認められる。但し、絶版となったパンチャラトラ派の初期文献の幾つかをまだ入手できていないため、本論文はパンチャラトラ派教理の完成態との比較考察に留まっており、マドヴァの思想をヴィシュヌ教の歴史全体の中で位置付けるには至っていない。このため世界形成説を中心に、今後更なるヒンドゥー教文献群との比較研究が望まれる。また神学上の教理に基づいた一般信者向けの宗教儀礼の体系、及び生活信条の解明も今後の課題である。更にマドヴァが活動した13世紀は、キリスト教世界ではトマス・アキナス、また日本では親鸞や道元が理性、行為、信仰相互のつながりについて独自の思想を確立した世紀でもあり、比較宗教思想の面からも、池邊氏が今後実りある研究成果をあげていくことが期待される。以上により当委員会は全員一致して、池邊氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。